

ボランティアガイドとしていつも訪れている広島市中区の平和記念公園は6月、鎮魂の思いに満ちていた。原爆の恐ろしさや和平な日常の大切さを若い世代に伝えている渡辺裕子さん(31)。新潟田市出身に、広島市に移り2回目の夏。犠牲者を悼む人並みの中で、原爆死没者慰靈碑と供養塔に静かに手を合わせた。

8月6日に生まれた誕生日が広島に原爆が落とされた日だと知った小学生のときから、原爆について考

た。現地の知人らに原爆を



争に至るまでの歴史や、日本本の加害なども学ばなければいけないと期待する。いい。自分の加害なども学ばなければいけない」と感じた。広島で暮らしながら原爆を学んできた。

廣島に移り住むことまでは考えなかつたが、2年前に英語を学ぶために行つた。フィリピンで転機が訪れた。現地の知人らに原爆を

者養成事業を始めた。3年間の研修を終えた50人が、4月から平和記念資料館などを講話を始めた。

廣島女学院高校(広島市中区)の生徒たちは、署名子連れらを平和記念公園に活動や被爆者の証言映像ある慰靈碑や原爆ドームを制作に取り組む。2年案内した。70年間、被爆者

年齢は今年初めて80歳を超えた。「被爆体験を語ることができる人が少なくなっていることに危機感がある」と話す渡辺さんは、体

ボランティアガイドとしていつも訪れている広島市中区の平和記念公園は6月、鎮魂の思いに満ちていた。原爆の恐ろしさや和平な日常の大切さを若い世代に伝えている渡辺裕子さん(31)。新潟田市出身に、広島市に移り2回目の夏。犠牲者を悼む人並みの中で、原爆死没者慰靈碑と供養塔に静かに手を合わせた。

8月6日に生まれた誕生日が広島に原爆が落とされた日だと知った小学生のときから、原爆について考

た。現地の知人らに原爆を

ボランティアガイドとしていつも訪れている広島市中区の平和記念公園は6月、鎮魂の思いに満ちていた。原爆の恐ろしさや和平な日常の大切さを若い世代に伝えている渡辺裕子さん(31)。新潟田市出身に、広島市に移り2回目の夏。犠牲者を悼む人並みの中で、原爆死没者慰靈碑と供養塔に静かに手を合わせた。

8月6日に生まれた誕生日が広島に原爆が落とされた日だと知った小学生のときから、原爆について考

た。現地の知人らに原爆を

伝えたい ヒロシマを つなぐ

<下>

ぼうと決心した。昨年4月から、広島平和記念資料館の「ピースボランティア」として、世界中から訪れる人たちに月2、3回の頻度で資料の説明や慰靈碑の案内をしている。60代、70代が目立つボランティアの中で30代は少ない。「自分がボランティアをしていることで、同世代の若者が『ヒロシマ』に興味を持った。原爆の恐ろしさや和平な日常の大切さを若い世代に伝えていく」と返ってきて驚いた。「戦

争に至るまでの歴史や、日本本の加害なども学ばなければいけない」と感じた。広島で暮らしながら原爆を学んだ。被爆者の高齢化と共に、被爆者の証言を残すため、伝承

者から話を聞いておかなければいけないと強く感じている。

知らない若者もいる。「関心のない人にも興味を持つてもらうにはどうすればいいのだろう」と悩む。

広島では記憶を伝え残そうと、さまざまな取り組みが生まれている。市は被爆者の証言を残すため、伝承

若者が関心持つて ガイドを務め責任感強く



平和記念公園で親子連れを案内する渡辺裕子さん(右)
「当たり前に感じる平和な日常を大切にする気持ちを
伝えていきたい」と話す=2日、広島市中区

「私が勉強して説明しておられる最後の世代が私たちかもしない。後世にも被爆者が語る経験にはかかる責任がある」と強調する。「被爆者の高齢化とともに、被爆者の証言を語ることで講話を始めた。」渡辺さんは今月上旬、親子連れらを平和記念公園に活動や被爆者の証言映像ある慰靈碑や原爆ドームを制作に取り組む。2年案内した。70年間、被爆者

世代につなげていく。(この連載は報道部・小柳香葉子が担当しました)